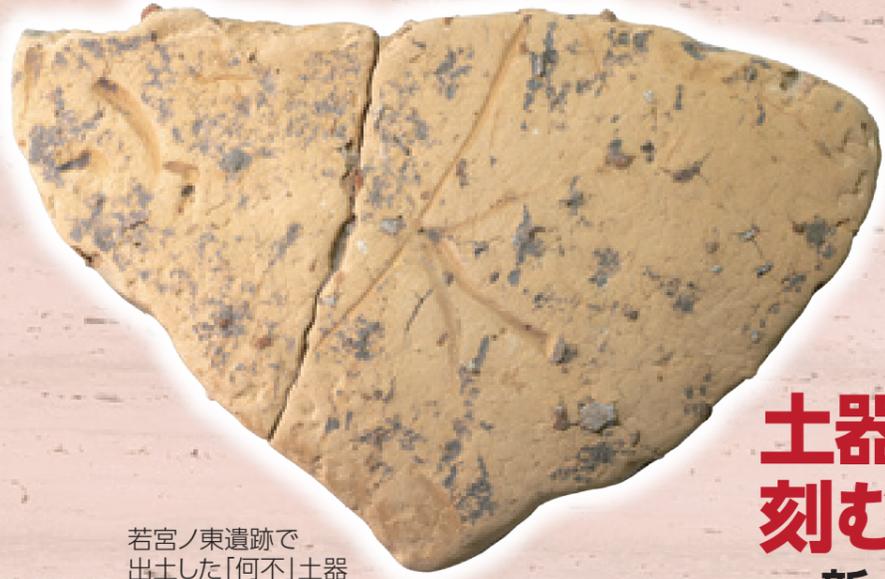


今年1月に新聞などで報道された、南国市篠原の若宮ノ東遺跡で見つかった刻書土器。考古学の立場から、高知大学人文社会科学部の考古学を専門とする宮里教授にこの土器が見つかった意義について寄稿いただきました。

# 土器に文字を刻むに至った背景 —新しい時代の到来—



若宮ノ東遺跡で出土した「何不」土器

## 若宮ノ東遺跡とは？

若宮ノ東遺跡からはおびただしい数の土器が出土しました。弥生土器の表面にはさまざまな痕跡があり、ときには絵画のような文様も見つかります。若宮ノ東遺跡から出土した土器片の一つに、縦横に連結する線の集合が認められ、文字のように見えました。ここから少し騒ぎとなります。

## 文字として見たら？

古代の文字に詳しい専門家に依頼したところ、斜め方向に並ぶ左上の「一文字目」は「何」、右下の二文字目は「不」と判読されました。続けて読めば「何不」で「なぜくしないのか」のような反語の表現となります。この二文字が文章の冒頭部分にあたり、さらに文字が続く可能性がありません。

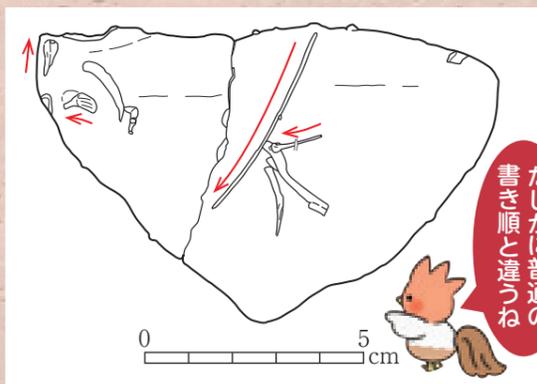
これは大変なことです。日本の歴史で文章の形で文字が使用されたのは、古く見積もっても渡来人によってさまざまな技術・知識がもたらされた古墳時代中期（5世紀）と考えられます。若宮ノ東遺跡から出土した「何不」土器は、土器の特徴により古墳時代初頭のものだと判断されます。日本に文章が出現した脈絡や時期の見直しを迫る内容であるため、慎重な判断が求められることとなりました。

## 文字と認識していたか？

ともかく「何不」を描いた手順、方法を詳細に検討しました。肉眼観察や高倍率の顕微鏡などを用いた観察で、どのような工具がどのような動いたのかを確認しました。

どうやら土器に描いた道具は、丸みをもつて細まる先端の幅が2mmほどの木製工具のようです。工具の先を差し入れ、弧を描くように引き、細く払うように抜く、として描かれた線はあたかも毛筆のようです。同時代の類似と比べても、はるかに文字らしく見えます。

ところが線を描く順番や線を引く方向を調べてみると、よく知られる筆順とは大きく異なることがわかりました。「何」では、各部分は下から上に向かって順に描かれ、また通常なら上から下に向かって線が引かれるはずの部分で下から上に向かって工具が動いていました。「不」では、上部の横線と



「何不」土器の線を引いた方向

たしかに普通の書き順と違っね

右側の斜め線において右から左に向かって工具が動いており、毛筆における筆の運びとは異なっていることがわかりました。

整った文字のように見えますが文字の描き方としてはおかしい部分があります。このことから考えられる一つの状況として、文字をよく知らない者が目の前にある手本を忠実に模倣した可能性が考えられます。

## 土器に線を描くこと

文字であることを前提とせず、検討の幅を、土器に線を刻むという行為一般に広げる必要が出てきました。

ここで問題となってくるのが「撥形文」と呼ばれる文様です。

撥形文は若宮ノ東遺跡などに類例があり、隣接する祈年遺跡では皮袋形土器という変わった形の土器に描かれていました。

撥形文は三味線の撥のように先端が広がる形の文様です。撥形のデザインは、



祈年遺跡で出土した皮袋形土器

さまざまに図案化されて、時代の変化に応じて姿を変えた興味深い文様です。

撥形文は頻繁に更新され、新しいデザインが地域間をめぐり行き交い、各地域でさまざまな器物に描かれました。

祈年遺跡や若宮ノ東遺跡の撥形文を見ると少し丁寧さを欠いた仕上がりがなっています。他の地域でも同じような現象が見られますが、この雑さについて、表現された文様ではなく文様を描く行為自体に意味があったとする考え方があります。すると、さまざまに行き交った撥形文の仲間として謎の文字が土器に描かれた可能性が頭に浮かびます。



撥形文

## 新時代の到来

「何不」土器が属する時代には、大阪、徳島、岡山で作られた土器が広い範囲で見つかっております。

文字ではなく、文様を描く行為に意味があったのかな？



問い合わせ／生涯学習課文化財係  
☎088-802-6062